

# 『グロリア・オールレッド :女性の正義のために』

監督：ロバータ・グロスマン、ソフィー・サーテイン  
出演：グロリア・オールレッド、サ・ブルーム、グロリア・  
スタイネムほか  
2018年/アメリカ/95分



予告

Netflix 映画  
独占配信

## 社会を旅する シネマ

きっともっと 近くなる  
きっともっと 知りたくなる

女性の権利を向上させたアメリカの法律家といえば、最初にルース・ベイダー・ギンズバーグが挙げられるだろうが、同時期に法廷の外で声を上げ続け、女性たちの権利と尊厳を守ってきた弁護士がいる。本作のグロリア・オールレッドだ。

彼女が弁護士になったのは女性解放運動の気運が高まっていた頃。グロリアは身近な性差別に対し訴訟を起こしていく。男子用・女子用と分けた商品をつくるおもちゃ会社を訴えたり、女性のほうが裾上げ料が高いことに対してデパートを訴えたり、女性は男性からおごられるものという固定観念で金額表示のないメニューを女性に渡すレストランを訴えたり……。

そんな彼女はテレビのトークショーにも出演を求められていく。女性の権利を第一に考えた発信は当時まだ少なく、共演者や視聴者から「頭がおかしい」と嘲笑されもしたが、彼女の発信は女性たちに、男女が対等でない社会のおかしさを気づかせていく。グロリアをよく知る人物は「女性を念頭に書かれていない法律の世界に、女性たちの問題意識をもちこんだ」と評価する。また、グロリアは「記者会見の達人」と言われるほど意識的にメディアの力を利用していくようになる。「養育費を払わない男性を逮捕せよ！」と検察局に立てこもるなど、今でいう炎上するようなこともしたが、それもこれも社会の注目を集めるためだ。

彼女がメディアを利用した背景には法律の限界

## 法律の限界を知る 女性弁護士の変革の歩み

アーヤ藍

を理解していたこともあるかもしれない。本作では国民的コメディアン、コズビー氏による性的暴行事件の被害者29人の弁護をグロリアが行っていたときのことが軸のひとつになっている。実はこの被害者たちは「ようやく告発できた」人たちばかり。すでに時効が過ぎ、訴訟は起こせなかった。

代わりにグロリアがとった行動は2つ。1つは未来のために性暴力事件の時効を撤廃する州法をつくるよう議会へ働きかけること。もう1つは被害者たちの声をメディアで発信し続け、「世論という法廷」で裁く、すなわち社会的制裁を与えることを目指した。後者は被害者女性たちをエンパワーメントする目的もあった。自らの体験を語ることで「被害者から生存者になり、変革の火付け役となってほしい」とグロリアは言う。実際、多くの報道陣の前で自らの思いを訴えた被害者たちは「人生で一番勇気を感じた」「清められた」と誇りと自信を取り戻していく。

「法律は非常に保守的な手段で、弱者を助けるには法律を限界まで追求し、クリエイティブになること」と本作で、ある女性法律家が言っている。法律で助けられないなら外側でできることを考える。そして法律自体も変えていく。そのいずれのためにもまず必要なのは声を上げ、問題意識を社会に醸成していくこと。変革の担い手は私たちだ。そう背中を押される。

アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

